

火狩りの王

一
春ノ火

闇を裂く弧は 収穫の鎌なり
犬を連れ 狩人がゆく

かく暗き世は 人の罪がため
いまわの星に めぐみを求めて
火狩りが駆ける 黒き森を

第一部 春の送り火

〈序章〉

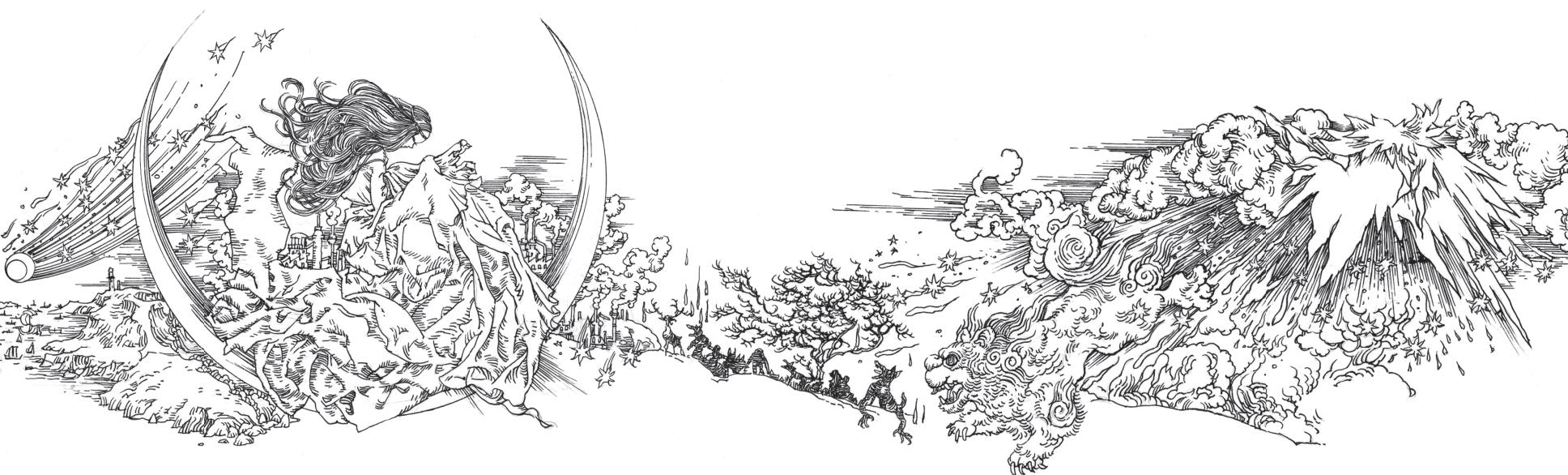
- | | |
|----------|-----------|
| 一 紙漉きの村 | かみすきのむら |
| 二 花嫁たち | はなよめたち |
| 三 雨の中の火 | あめのなかのひ |
| 四 黒い森 | くろいもり |
| 五 世界のかけら | せかいのかけら |
| 六 水晶の竜 | すいしようにりゅう |

152 115 95 69 41 10 8

第二部 けもの道

- | | |
|--------|--------|
| 一 船祭り | ふなまつり |
| 二 〈蜘蛛〉 | （くも） |
| 三 宴 | うたげ |
| 四 明楽 | あきら |
| 五 狩る者 | かがくるもの |
| 六 トンネル | わん |
| 七 湾 | わん |

367 342 318 285 264 237 190



第一部 春の送り火

金色の弧が、ねばりつく闇を切り裂いた。

一瞬に千もの火花が光の矢をえがき、森の夜気をあざやかに焦がし、消えた。

静まる。

夜の闇がもどり、ふたたび虫の音が空気を満たした。いつからとだえていたのか、またなにを思つてうたいだしたのか、虫たちはそ知らぬ軽やかさで音色を響かせている。

灯子はしりもちをついた恰好のまま、目の前に立つその人の背を見あげていた。知らない人だつた。いま、出くわしたばかりの。狩りの衣をまとった背中が、はげしく上下している。鎌をふりおろした姿勢のまま、その人は動かない。

かたわらの犬が舌を出して、鎌を持つ主を見あげる。金色の鎌の刃先には、べつとりと黒いしづくがしたたつていて。炎魔の血液だ。たつたいま鎌に切り裂かれた炎魔は、一瞬のうちに息の

根を止められ、急所をとらえた傷口から、とろとろと金色に光る液体を垂れ流していた。

「……かなた」

ぜえぜえと荒い息を一つ、すう、と長く吐き、灯子を背に立つ男が言つた。こちらをふりむく。胸から下は炎魔の爪にえぐられて、どくどくと血が流れ出していた。

「こいつは、かなたというんだ」

その言葉にこたえるように、ひと声、犬が吠えた。甘えのにじまないその声に、ひげにおおわれた顔がつかのま笑みを浮かべる。そして、男は撃たれた鹿のように土にたおれた。もう息はなかった。

犬は熱心に主の顔をなめ、ずいぶんと時間をかけてその仕事をおえると、男の手から金の鎌をくわえとり、灯子のほうをむいた。犬もまた横腹に傷をおつっていたのだが、そんなものなどまるで無視して、黒い目がじっと灯子を見つめる。

火狩りと呼ばれる男が、狩り犬と鎌を残して、死んだ。

一 紙漉きの村

丘にのぼると、森を見わたすことができる。樹々の海。黒々とただれた色の樹冠がどこまでもつらなる、灯子が生まれたときから見てきた景色だ。

世界のほとんどを埋めつくすという、黒い森。山であろうと、谷であろうと、黒い木々が埋めつくさない場所はない。その樹海の中に、はなれ小島のようにして、結界に守られた人の暮らす村が、ぽつりぽつりと顔をのぞかせている。

「かなた、あのあたりよ」

灯子はかたわらに立つ犬に、森のひとすみを指さしてみせる。灰色の毛並みをした犬は、背すじをすっと伸ばし、風の気配に耳をすましている。ならかな山の斜面に村はあり、その中にこんなもりと丘がつき出している。そのため村には坂ばかりだったが、丘のあるおかげでいろんな種類の植物が自生し、それはこの村で作る紙を彩るのに、大いに役立っていた。

この丘のふもと、村の結界を、わずかにはなれただけの場所。あのあたりが、この犬の主だつた火狩りの死んだ場所だ。炎魔に襲われた灯子をたすけてくれた、どこのだれともわからない火狩りは、村の者たちによって手厚く葬られた。遺体に鬼火よけの薬剤をかけ、棺桶に入れて。

灯子は犬を連れて、毎日その墓に参る。火狩りにたくされたこのかなたという犬は、片時も灯子のそばをはなれずにいた。灯子にしかなつかず、傷の手当てをしようとほかの者が手を出すと、咬みつこうとする。そのせいで、灯子はほかの子どもといっしょにする畠仕事ができない。

子どもだからといって、働けないままではこまる。灯子ははじめ、かなたを縄でつないで、家のそばに生えた栗の木の根もとにくくりつけておいた。が、畠へむかう林道を半分も行かないうちに、犬が走って追いついてきた。自分で縄を咬みちぎったのだ。三度試して三度とも、同じことになった。しまいに縄を無駄にするだけだと大人たちから叱られ、灯子は始終、犬といっしょにいることになった。

灰色のごわつく毛におおわれた体と、鋭い鼻、よく動く耳。見るからに賢いこの犬は、それでも主人を失った痛手からか、炎魔によつてうけたけがが治つてからも、幼子のように灯子のあとをついてまわった。

丘の上の花を摘み、灯子は犬といっしょに坂道をくだる。村の門の反対側、守り神の祠のそば

が、村の墓地だ。大人の背を頭二つはゆうにこえる、白く塗られた結界の柵が、森と村とをへだてている。

五つの石を組んだ墓に花を供え、土についたひざが痛くなるのを無視して、じっと目をつむつて頭をさげていた。——人が死ぬところを、またも見るのは思わなかつた。白い柵のむこう、黒い森へ出ることは禁じられている。禁を破つた灯子をたすけて、この土の下に埋まる人は死んだのだ。

染め紙の飾りを吊るした守り神の祠から、こちらを見ている目があつた。小さな祠の中にはつぱりとおさまる、小さな小さな人。かむろにそろえた髪も、頬も着物も雪のように白い。目だけがぼちりぼちりと若葉の色をしていて、人ではないあの子どもは、この村の守り神——この国を統べる姫神の、小さな分身だった。

「童さま、お邪魔いたします」

灯子はこちらを見つめる稚児すがたの守り神に、丁寧に頭をさげた。口をきかない守り神は、ただじつと灯子と犬を見つめ、そして祠の暗がりに、ぼやりと溶けこんですがたを消した。

夕方の風が一つ吹き、それにはじかれるように、灯子は立ちあがる。駆け足で家へむかつた。村人の住む家はみな斜面の反対側、丘の西側に建てられている。

墓地から、古い橋をわたる。下を流れる川の水は清澄で、いつでもつめたい。川ばたにはあわせて六棟の紙漉き小屋がならんでいて、そのむこうの楮林をこえれば、家まで林道をたどるばかりだ。

「ただいま」

戸を開けると、おばさんと燐が夕飯のしたくをおえていた。家のなかは、出汁とよく煮えた野菜のいいにおいがする。薄い木戸を開ければ、すぐに土間。炊事をする土間のむこうに、一段高くな板の間がある。そこで食事をとり、床をのべて眠る。村の家はどこも同じ、二間きりの造りだ。もどつてきた灯子に目もくれず、おばさんたちは粗末な膳の上に箸をそろえ、雑炊を椀によそう。天井から吊るされた卵型の、ごく小さな照明の奥、陰の中にすっかりなじんで座っているのが、灯子の祖母だ。

「フン」

ふいに燐が、穴の開きかけて使えない小鍋を、こちらへつき出してきた。もうさめた雑炊のうわづみが入れられている。

「犬の飯」

灯子に鍋を持たせると、燐は無言で土間を指さした。そこで食わせろ、という合図だ。言われ

なくとも、灯子はいつもそうしている。最初は家に入れることにも渋い顔をしていたおばさんと
燐だったが、けがをおった犬が灯子から決してはなれないのがわかると、しかたなしに土間のひ
とすみをあたえたのだつた。

かなたは自分の居場所をよく心得ていて、火をあつかう炊事場から遠い、土間のすみの敷き藁
の上に行儀よく座つて待つていた。

戸を閉め、かなたに餌をやる。これっぽっちの餌では腹のふくれないかなたは、灯子と墓参り
に行く道々、ネズミやモグラを自分で見つけては捕まえていた。

四人の人間が食事を口に運ぶ音より、かなたの立てる音のほうが大きい。それでも、わずかな
野菜くずしか入っていない餌を犬があつというまにたいらげると、箸を持つ四人の食事は、いつ
そう静かなものになつた。

もともとこの家では、だれもあまりしゃべらないのだ。

まつ先に食べおわった燐が、大きな足音をさせて箸と椀を流しにさげる。瘦せつぱちのくせ
に、燐が動くといつも大きな音がする。灯子と同じに頭のうしろで縛つただけの髪も、燐のそれ
は獣の尾のようによく動くのだつた。

おばさんも箸を置き、灯子のばあちゃんがぼそぼそと食事をとるのを、横目でうかがつっていた。

と、雑炊の半分ほど残った椀をかたりと置いて、ばあちゃんがふいに口をきいた。

「灯子よ。犬を、そろそろかえさねばいかんじやろう」

薄暗がりの奥、ずっと以前から準備されていたような声に、灯子は思わず、食べかけの椀をと
り落としそうになつた。

「犬のけがは、もうええのじやろうが？」

まぶたをぎゅうと閉じあわせたばあちゃんの顔は、まるで、しわばかりでできているように見
える。その中に口が動いて、色のあせた舌がときおりのぞく。

うんともすんともこたえずにいても、灯子がかすかにうなずいたのが、ばあちゃんには見透か
されている。土間から燐が切れ長の目で、じろりとこちらをうかがつっている。

「守り石と、火の鎌と、あの犬と。おかえししに行かずばなるまい」

ばあちゃんの言う守り石とは、炎魔から灯子を救つた火狩りの遺品の中にあつた石だ。てのひ
らにつつみこめるほどの石を、故郷をはなれる者はかならず懷に持ち歩く。遠くへ行く者に、家
族や親しい者が、守り神の庭からいただいた石を持たせるのだ。火狩りが持っていた守り石のな
めらかな表面には、國を治める姫神のそれとはちがう、聞いたことのない神さまの名が彫つて
あつた。

そして――

灯子はばあちゃんのうしろの神棚の上、無垢紙に丁重につつまれた火狩りの鎌を見あげた。金色をした鎌は、狂いなく弧をえがき、三日月の形をしている。柄の部分には裂いた粗布がきつく巻きつけられ、手垢と血が染みついていた。火狩りの鎌は革でこしらえた入れ物にさしてたずさえるのだというが、灯子をたすけた火狩りはそれを身につけていなかつた。むき出しの刃を、たずさえていたのだ。村で作るいちばん上等の紙につつまれ、いまその刃は見えないが、灯子は鎌の形を克明に思いえがくことができた。黒い森の闇をあざやかに裂いた、黄金の一閃も。

「工場のかね」

ぽつりと言葉を投げかけたのは、おさんだつた。不機嫌さによつて刻まれたしわと頬のたるんだ顔は、娘の燐とはちつとも似ていな。垂れたまぶたで、ほんとふさがりそくな目の光は、それでも、思ひがけず鋭い。

「あの守り石の文字、手で彫つたもんじやなかろう。ああいうのは、工場でこさえよるんだ。あの火狩りは、首都者かもしれん。そしたら、犬をかえすに首都まで行くことになるわいね」おさんは、ばあちゃんが話をおえてから食事を再開するつもりなのを読みとつて、先に薬の準備をはじめる。

灯子は固唾を呑んで、箸を持ちあげたままの手をこわばらせていた。土間でかなたがうしろ脚で耳をかき、寝床の具合をそもそもぞと整えてから体をまるめた。

「灯子が行くかいな、首都に」

おさんの目が、灯子をとらえた。いつでもなにかをにらみつけるような目は、赤く充血していいる。その目が、疑わしげにこちらを見ている。それは、灯子とばあちゃんが、この家に住むことになったときと同じものだつた。お前は、ちゃんと働けるのか。邪魔にならずにいられるか。灯子のことを重荷に感じてゐる、あの目だ。

「首都？ 灯子が？」

ゆすぎおわつた椀を流しにほうり出して、燐が居間へいざりあがつた。細い眉がつりあがり、その声には、ずるい、という非難の響きがありありと混じつてゐる。村に生まれた子どもなら、だれでも一度は首都に憧れるものだ。そこには巨大な工場都市があり、見たこともないほど大勢の人間が住んでゐるのだといふ。森の中に点在する村の結界の内側に閉じこもり、身を寄せあつて暮らす生活からは、想像もできないほどの華やかさなのだと。

おさんにも燐にも返事をできぬで、灯子は目を白黒させていた。雑炊は、もうすっかりさめきつてゐる。

おさんにも燐にも返事をできぬで、灯子は目を白黒させていた。雑炊は、もうすっかりさめきつてゐる。

「そんな、わたし……行かれん」

箸を置き、正座であとじさりながら、灯子はうつむいた。あの火狩りには、命をたすけてもらった恩がある。そうはいっても、灯子のような子どもが首都へ行つて、また無事に帰つてこられる保障はない。黒い森には炎魔が棲み、大の大人でも踏み入ることなどない——炎魔を狩る火狩りや、森に暮らす木々人をのぞいては。

「灯子よ」

ばあちゃんの声だった。家中の空気をびしりと天へ引きのばすようなその声に、かなたまでもが耳を動かした。

「火狩りさまは、尊い仕事ぞ。何十べん聞かしたか、昔は人にあつかわれる火がなかつたために、このばばのように、赤子のときには目をつぶされて、暗闇の中、働くよう訓練された者が山とおつた。森の下で這いする暮らしをまぬかれて、結界を張り、村を作られるようになつたのは、ほんの六十年ほど前からのことじや。火狩りさまのおかげぞ、森を逃れ、目を開いて、煮炊きした飯を食うて暮らされるのは。お前は川も魚も、草も虫も人の顔も見えようが、ばばは、一度かぎりも見たことがない。お前たちが、目を開いて暮らされるのは、危険を冒して火を探つてきてくださる、火狩りさまのおかげぞ」

灯子は、自分のひざに目を落として口ごもる。ばあちゃんに幾度も聞かされた昔の話……ばあちゃんが生まれる前、炎魔を狩ることのできる火狩りが現れるまで、人々は森の地下に穴を掘り、あるいは廃墟の地下にこもつて、暗闇の中で息をひそめて暮らしていたのだという。柵を作つても、罠をしかけても、炎魔は襲つてくる。火狩りの鎌でしとめなければ、黒い獣たちはなかなか死なない。そのために、まつ暗な地下に身をひそめるしかなかつたのだと。

いまこの国を治める神族と呼ばれる者たちが、火狩りに鎌をさずけ、土地をならし、川の水を呼んで、結界に守られた村を作つてくれた……祠の童さまは、その神族の姫神さまの分身なのだ。

「火狩りさまは、守り神さまからご加護をうけて、危険な狩りをしなさるのじやと。その火狩りさまが、灯子、お前を救うてくださつたのじや。その犬は、火狩りの仕事をたすけよと、特別に馴らされた犬ぞ。おかえしせばならん。犬が動けるようになつたのなら、家族じやつた者のものとに、形見とともににおかえしせばならん」

ほとんどの歯のないばあちゃんの声は、それでも一つ一つの音がよく通る。かすれかかった声は床の上を這い、家の中を流れる空気そのものになつてしまふ。

「もうじき、回収の車がまわつてくるころじやしね。上等紙を多めに持たせれば、娘つ子と犬一

四、乗せてくれんこともなかろ。紙漉き衆に相談してみるかね

おばさんは一人うなずきながら、手は休ませることなく、ごく小さな匙で缶に入った薬を湯のみへ量り入れてゆく。燐が、ドンドンと足音を立てながら土間からやかんを持ってきて、湯のみに湯をそそいだ。

ばあちゃんの飲む薬湯のにおいが、ふうんと甘く立つ。甘みと渋みの混じった、灯子がそのにおいにいつまでも慣れずにいるこの薬は、森から木々人が持つてくるものだ。

「ねえ、灯子がいやなら、あたしがかわりに行つたげようか」

切れ長の目を大きく見開いて、燐がひざを乗り出す。おばさんが軽い舌打ちの音で娘のでしゃぱりをたしなめた。

「たわけたことを。できるわけなかろう、灯子でなけりやあ咬みつこうとする犬を連れてなんぞ」そうして、お前はずっとこの家にいるのだと言いわたすかわりに、ばあちゃんとおばさんの食べおえた椀を燐に押しつけた。燐は瘦せた頬をあからさまにふくらまし、灯子をねめつけた。その目がうつすら赤くうるんでいるのを、灯子はうつむいて、見ないふりをした。

食事がおわれば、照明は落とされる。貴重な明かりは、だいじに使わなければ暮らしがつづかない。村で使う燃料も照明も、およそ半年に一度まわってくる工場の車から買いとるのだ。首都

には専属の火狩りたちがいて、工場で使うもの、各地の村に提供するもの、大量の火を集めているのだという。

(あの人も、そうじやつたのかな……)

寝静まつた家中、灯子は勘だけをたよりに、神棚から火狩りの遺品をそつとおろした。吊るし紐から卵型の照明をはずし、両方をかかえて外へ出る。灯子の動く気配に、かなたがあつさりと目をさめし、物音を立てずについてきた。

家の裏へまわって、卵型の照明をふって明かりをともし、ひざの上の無垢紙を開く。

金色の三日月……火狩りの鎌は、農作業で使うものとはちがい、鉤状の形をしている。鋗びも刃こぼれもない、完璧な弧だ。そして――

灯子は、鎌といっしょにつつまれていた小石を手にとり、明かりを近づけた。すべらかな小石の表面には、たしかに文字が刻印されている。

〈常花比命〉

彫刻したのでも、染料で書いたのでもない、石に自然と浮かびあがってきたかのよくな文字が、知らない姫神さまの名前を記している。かなたが顔を寄せてきて、熱心に遺品のにおいを嗅いだ。

「……帰りたい？」

声をひそめて、灯子は訊いた。訊くまでもないことだと、すぐに自分でかぶりをふった。

家族がいるのなら、会いたいに決まっている。会えるものなら、なにをしてでも。……

「明かり、もどさんかね。もつたいない」

突然うしろから叱られ、灯子は飛びあがりそうになった。悲鳴すらあげられずにふりむくと、

そこには燐が立っていた。

「あなたはほんとうに、疫病神じゃ」

燐の目が、うなりかけたかなたをものともせずに、ひたすら灯子をにらみおろしている。

「あなたのせいで人が死んだ。あなたのせいで、あたしと母さんは、せまい家がもつとせまくなつた。今度は、あなたのばあちゃんの世話を押しつけて、出てくんじやという。あなたなんか、ほんとに——」

灯子はただ、燐を見あげていることしかできなかつた。恨みの言葉をつらねる、姉でも従姉でもない少女を。ちっぽけな結界にかこまれた、せまい村の中で、いつもいらだつているこの子を。「ほんとに、大きらい」

ぱっと伸びてきた燐の手が、灯子から照明をとりあげた。たばねた髪を尾のように揺らし、燐は家中へ駆けこんでしまつた。灯子とかなたは、まっ暗闇にとり残される。

無言で、犬の首すじをなで、そこから手をはなさないまま、灯子はひと足ひと足、家の戸口をめざした。手にかかえた無垢紙が、すら、ときさやかな紙ずれの音を立てた。

今夜は月もなく、ばあちゃんの目と同じに、なにも見えない。暗闇の中、灯子は幾度も、あのときの鎌の軌跡と飛び散る火花をまばろしに見た。

翌朝、おばさんにともなわれて、灯子は紙漉き小屋へむかつた。手には、朝からおばさんが大急ぎでこしらえた甘だれの団子がつまつた桶をさげている。うしろからは、もちろんかなたの脚が規則正しく林道を踏む音がついてきていた。

ばあちゃんが一人で待つ家と、集落があるのは丘の西側。紙漉き小屋までは林の中の坂を、きのうと逆にたどる。桶の持ち手が指に食いこんで痛かったが、灯子は黙つて、おばさんのうしろを歩いた。

村の共同の畠では、野菜がこんもりと若い葉を萌やしている。豆のつるもよく伸びてきた。灯子と同じ、村の子どもたちが十人ばかり、水をまき、雑草とりをしている。はだしで畠に入り、野菜の世話をするのは、紙漉きの見習いができる年になるまで、村の子どもがあたりまえにする仕事だった。